

§ 1. 南アフリカの初仕事

昭和46年に数回冷凍機の試運転及び修理で、東南アジアへ出張したことがある。

しかしいずれの場合も当社の製品に関する仕事で、製品の情報が思いのままに収集することができたが、今回の南アの出張は全く異なる。即ち当社がライセンス生産している米国のW社製のターボ圧縮機をデンマークの会社が購入し自社製の熱交やオイルクーラー、ベンコントローラ及び制御機器を組み込んで南アフリカに販売したものでありそのターボ冷凍機がヨハネスブルグにおいて試運転時に故障が起き、ビルのオーナーはメーカーのエンジニアが修理しなければ工事代金を支払わないとのことでゼネコン、コンサルトエンジニア、冷凍機販売店共大変困り、デンマークのアSEMBラー及び米国のターボ圧縮機メーカー双方にエンジニアの派遣を依頼したが、どちらも自社製ではないとのことでエンジニアの派遣が出来なかった。

そこでコンサルタントエンジニアが米国社と圧縮機、熱交換共にライセンス生産をしている我社のエンジニアであればビルのオーナーの了解が得られるとのことで、我社にサービスエンジニアの派遣を要請してきた。

そのころ我社では南アにおける冷凍機の総販売店を当冷凍機の販売店でもあるS社と契約を交わした所でもあり、又当冷凍機の修理をすることが契約を結ぶ条件でもあったようだ。

このような状況下で私は当時の航空路線がロンドン経由の34時間という長旅で、南アのヨハネスブルグに到着した。

ヨハネスブルグにはその後一緒に仕事をする事になったイギリス人のエンジニアが出迎えてくれた。

次の日、販売店の営業部長とコンサルタントエンジニアと共に事故機を点検した後オーナーと面会をした。

事故は試運転時に機械室が1.5m近く水没し機械が水浸しになったということであったが、水はすでに排水されていた。ただ壁面及び機械の本体や冷水等の配管にそこまで水没したことを証明するように一本の黒い線がはっきりと確認できた。



オーナーは事故の原因を明確にした上納得がいく処理をしなければ修復しても使用しない。特に事故のメカニズムを明確にすることと完全な修復が日本から来たエンジニアの仕事だとはっきり言われた。

事故の内容は一目で凍結パンクであることがわかったが、試運転時になぜという疑問を解明しなければならないのが私の仕事となった。そのビルはヨハネスブルグのショッピング街の中心にあるハイポイントという高層ビルでヨハネスブルグの展望台の近くにあり、オーナーとの面会の後原因究明のため分解調査に入った。

なお修理の事も考えてターボ圧縮機のオーバーホール部品の手配と凍結したチューブの手配を行うと共に、熱交の乾燥も昼夜連続で行うように装置を製作した。

先ず調査に当たって、凍結防止サーモがなぜ作動しなかったかということが誰が考えても思い当たる最初の疑問であり、凍結防止サーモのテストを行なった。やはり凍結防止サーモの感温部を冷やすとペローズでできた接点は -1.5°C 程度にならないと接点が開放しなかった。

しかしコンサルタントエンジニアは自分がデンマークまで出向いて凍結防止サーモを自分自身の手で作動テストをしたので試運転時に作動不良となっていた事は考えられない。シーケンスのミス又は他になにか原因があるはずだとのことで凍結防止サーモの作動不良について全く関係ない事と取合って頂けなかった。

その後シーケンスチェック、接点の溶着等調査したが、異常は見当たらなかった。ヨハネスブルグに着いて四日目の朝、顔の皮膚がかさかさになり、何か異常を感じた。そう思えば使用したタオルや洗濯をした下着が今まで旅行したときよりも簡単に乾くような気がした。乾燥のせいで皮膚が乾き、腕や脚まで亀の甲のような文様に、白い線が入っていた。



あっと思い当たった。ここは気圧が低く蒸発しやすいのだ。さっそくホテルのボーイを呼びたつぷりとチップを渡して話をした。ここの海拔はどの位だ、約600m、これですべての疑問が解けた。即ちヨハネスブルグは高地であり、気圧が低くペローズやブルドン管を使用した機器が大気圧と内圧で作動し、凍結防止サーモのペローズの中の内圧が温度の低下により圧力が低下しても

大気圧が低いために接点を切るのに必要な寸法までペローズが縮まなかったわけだ。

以上のようなことをオーナーに説明したところ、原因はよくわかった、後は修理をし機

械が動けば君の仕事は終りだと、オーナーは言ってくれた。

それから約一ヵ月半かけて製品の乾燥を行った。その方法もターボ冷凍機のクーラーの周囲に 80 k W の電機ヒーターを置き真空ポンプで常時器内を真空に引くと共にターボ冷凍機と真空ポンプを接続する配管の途中に -30°C のサブゼロを置き水分があれば真空ポンプに水分が入る前に水分がサブゼロ内で凍結するようにし、定期的に凍結した水分を解かして機器外に取り出し乾燥度合いを確認した。

当初は3時間で 1000cc 程度の水が出たが1ヶ月後には24時間で水滴一滴程度となりコンサルタントエンジニアからパーフェクトと言われた。もちろん乾燥前にチューブの取り替えをし、乾燥作業と同時にターボ圧縮機、モーター、抽気装置等もオーバーホールをした。

その作業の間販売店の営業部長は、次々と現地のコントラクターやコンサルタントエンジニアを作業している私の所に案内し、これが日本のエンジニアだ必要あればいつでも呼べる。仕事は完全だとPRに余念がなかった。帰国予定の数日前販売店の社長は私の滞在中に当社製の40台近いターボ冷凍機の販売契約が出来た。又すでに事故機の販売代金も今日入金された。

日本への帰路、世界中の行きたい所を全部聞かせてくれ、全部かなえるからと言って喜んでくれると共に、その夜社長の家族と共に楽しい思い出の一夜を過ごした。

§ 2. かえりみて-良き日悪しき日

昭和25年運輸省の役人を未練なく辞めて、入社したのが小型冷凍機メーカーで、冷媒はメチルクロライドでした。

当時の冷凍機サービスマンは高等小学校卒が大半で、職人的気質が強く、苦勞の末見覚え大切なノウハウはなかなか簡単には私には教えていただけませんでした。

またサービスマニュアル等の資料も全くなく、自身が書店にて専門書を購入し勉強しなければならず、また高度の学術書はあっても初心者向けの本はなく困った時代でした。

入社2ヵ月のある日突然「今日夕方から小僧を一人つけるから冷凍機の据付けに行ってくれ」といわれました。その時の私は膨張弁、ドライヤーの名前ぐらいいは聞いていましたが、それがどんな役目をするものかもわからないレベルでしたので、辞退したのですが、「お前さんは高い教育を受けているからそのぐらいいのことは出来るはず」といわれ、行かざるを得なくなりました。

近くに据付けてある冷凍サイクルをスケッチして、それを持って現場に行きました。夕方から大雨になり自動車のない時代でしたので、冷凍機や配管材料を大八車に積んで、職人さんが現場まで運んでくれました。



ところが材料が雨に濡れ、又冷媒の水分含有量が多かったため、配管接続後水分ショックに悩まされました。朝方までかかって7~8回乾燥剤(塩化カルシウム)を入れ替えて10時頃にはやっと試運転が完了することができました。

帰社しますとサービスのみんなが笑いながら「うまくいったか」といったので「なんとか完了した」と答えると怪訝そうな顔をしました。

その日は一日中寝不足と重なって不愉快でした。嫌がらせと意地の張り合いの時代でしたが、それが今の私を作ってくれたのかも知れません。

そのサービスの時代の思い出の一つを書き記します。

入社一年ぐらいは冷凍機の設計をやっていましたが、サービスの手が足りないとのことでサービスに行くことになりました。ある朝道具類を皮カバンに入れ冷媒ガスは小型ボンベに充填して大フロシキで包み電車で三宮へ、それから神姫バスで東条へ行きました。到着したのは午後二時頃で早速点検したところ圧縮機の吐出板弁が悪いとわかりましたが、部品の持ち合わせがなく困りはてました。

客からは早く修理してくれないと肉が腐るとの督促でしたので、苦肉の策として古いノコギリを出してもらいタガネで切って砥石で手仕上げして一枚の板弁を作り上げました。

やっと取り付け運転しましたところうまくゆき大変喜んでもらいました。

翌朝松茸の持ち山があるので案内するとのこと、同行して山に入れば30分程にして大きなカゴにいっぱいとれ手土産として2kg程頂きました、もっとも当時は松茸よりも肉の方が貴重品でしたが、いま思えば夢のようなことでした。

山へ案内してくれた男の子2人は伝聞によると今関西方面で三田屋というステーキレストラン店を多数経営されておられるそうであります。

§ 3. 水のはなし、日報のはなし

水のはなし

1969年10月、私は冷凍空調部門の営業所勤務を命じられ赴任いたしました。

その前の一年余を病気のため休業しておりましたので、その営業所では見習としてサービスマンと一緒にユーザー回りをしたり、事務の手伝いをしておりました。

翌年4月からは責任者としての仕事につきましたが、何分にも他の部門から参ったうえに、僅か半年位の勉強ではとても冷凍空調の専門的な深いところの事は、判らず色々と悩み苦勞もいたしました。

事務やセールスについては負けない自信がりましたが、技術についてはそうは参りません。そこで皆が余り知らないことで、冷凍空調に必要なことはないかと考え、先ずクーリングタワーやチラー、ボイラーに使う水について、勉強を始めることにしました。

冷凍空調工事に携わっている技術者やサービスマン、又それを使っているユーザーの方々に、本当に水に詳しい人は少なく、だれにも負けないよう、水について勉強をいたしました。



水については私自身水回路の清掃作業に出向いたり、ユーザーの使用する水を分析に出して、その分析表を持って説明に行ったりしました。ある時ある市場での出来事ですが、冷凍機のコンデンサーがパンクする事故が起きました。その原因を調べてみますと、クーリングタワーの傍に煙突があり、煙突から出る煙をクーリングタワーが吸い込んで、水に悪い影響を及ぼし、短時間で冷却水が酸性になっていることが判明しました。

その市場の幹部の一人に元水道局の方がおられ、水は絶対に悪いことはないとおっしゃり、あくまでも機械が悪いと主張され、事実を納得してもらうのに相当時間がかかったことがあります。了解していただいた時にはホットしたものです。

このような経験を重ねながら、水について今でも勉強を続けている次第です。

日報のはなし

又、日報作成を通じての自己管理について取り組みました。当時の営業所の社員は、本社から言われる通り、成り行きにまかせて仕事をしておればよいという考えでありました。

また独立採算制ではないので、営業所として赤字が出ても、そのマイナスは本社に補填してもらえばよいと、安易に割り切っていました。

そこで社員一人一人の作業時間の分析と、一人当りの諸経費を計算して表を作成するようにしました。その表に基いて会社の経営状態と、個人個人の状態を説明し、会社とはなにかを話しました。

日報作成については何よりも正直に記入してもらえるよう頼みました。私もセールスマンとしてお得意さま獲得に廻った事や、途中での休憩のこと……喫茶店で休みながら得意先の分類整理をしたり、マンガを読んだり……をありのままに話をしました。又、日報は誰のものでもなく、自分自身のためのものであり、それを自己分析に役立てたり、自己規制の基にしたりしながら、改善すべきところは即時改善することの必要性を説きました。



サービスマンにとっては、客先に居るときが、ゴールデンタイムなので、いかに短時間に要領よく好成績（後からクレームがこないよう完全に修理すること）を上げるか研究することの大切さを教えました。

又、サービス作業に赴いたときでも、お客様にお会いしたときはセールスマンとなって保守契約のことや新製品の事など話をするよう指導して参りました。

現役を退いた私が水のことや日報の話を書き綴って参りましたが、これからも、色々と勉強を続けていくつもりであります。

§ 4. かえりみて-サービスの創生期

過去における技術的な話になります。

空調・冷凍のメンテナンスに仕事として従事したのは昭和39年からである。

冷凍・空調については全くなにも知らず、製氷、アイスクャンディ等の製造を遠目に見た思い出がある程度であった。

メンテナンスの仕事初めの現場は開放型冷凍機ユニットを使用した工事であった。作業の感触は未だに覚えている。

重量物の半密閉圧縮機付きパッケージ型の全盛期でもあり、特定の場所しか据え付けがされていなかった。

喫茶店等の業務用にウインドタイプが採用されているものの好調だとは思えなかった。

販売の拡大に伴いメンテナンス要員が必要であるものの実際は技術者、人材不足でもあった。製品の種類が少なく中には用途に合わせて開放型の冷凍機、熱交換器ユニットの組合せで使用した現場を多く見かけている。現場の条件にあっていないものは無理が生じて発生するトラブルが多く、加えて、施工技術未熟から起こるものも多く、後処理するために調査、対策に多く参加させてもらった。

その結果、現場において知られていない 多くの問題に触れて知り得たことが大きな収穫であった。

今から見れば技術的に未熟な時代でお客様には、多くのご迷惑をおかけしたことと思う。時の流れに伴い、技術のレベルアップの足掛かりとなりメンテナンスの中に多く生かされて基礎基盤となっていることであろう。

技術的な話の中で「冷えが悪い」というサービスコールについての処理に冷媒ガス充填膨張弁の調整が多かったと思うが、これに並行して処理をしなければならない事項に冷媒ガス中のエア抜き、冷却器の適性（過冷却）、コンデンサー（過冷却、詰まりによるヒート）他不具合等があった。



今からみればラフな技術管理がなされていた。よき時代？ 手探りの時代？であった。

クレーム問題に技術的に、他の物件にも関連が生じていると判断したときには、要注意としてキャンペーンを行ない、再発防止する。このようにして仕事の目標達成ができるよう気配りをしたことにつけるような思いがする。

§ 5. 思い出のCS

私が製造からサービスに変わって間もなく、総務部長がサービスの事務所を訪れて工務課長とお話された後、緊急サービスで出動するよう私は命令を受けマイカーに工具を積んで出動した。

勿論夜9時頃であったのと、方向が自宅と同じ方向であったので修理後直接帰宅するつもりで1人で訪問した。

現地に着くと農家の主人はすぐに私を冷蔵庫につれて行き中に保管中の取れたばかりのみずみずしい野菜をこのまま明日の出荷までもたさなければならない。早く冷蔵庫を修理してくれ、とのことであった。

ご主人のお話によるとスイッチを入れても1~2分後に止まるとのこと、もう一度運転するようお願いしたところ、ご主人は凝縮器高圧スイッチをリセットされたので、私はそれを見て冷却水関係のトラブルと判断し冷凍機を運転する前にクーリングタワーを2人で見に行った。

ところがクーリングタワーのファンモーターアセンブリーの取付け台がグラスファイバー製のクーリングタワー本体の破損により脱落、幸いファンの羽は傷ついてはいたが折損はなかった。

ご主人は一瞬修理をあきらめかけたが、「なんとか冷凍機を今夜だけでも運転する方法がないものか」と低い声で言うともなくつぶやいた。

本当に困っていることが良く判りなんとかしたい思いで、応急処置をしたいが1週間しか持たないので、その間に出来るだけ早くクーリングタワー本体を交換するという条件で修理をすることになった。

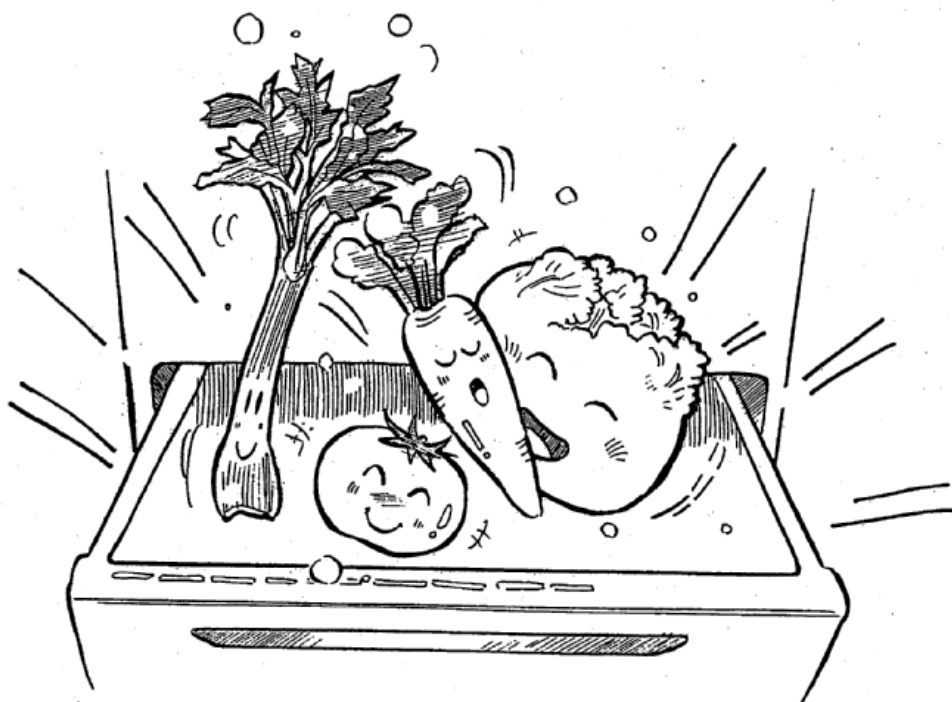
私には、5馬力のタワーだ、なんとかするとの思いでタワーのケーシングを木材で修理することを心に決めてご主人に板切れ、のこぎり、釘等の準備をおねがいして作業にかかった。

木材は古い林檎箱を利用してモーター台を作り又、クーリングタワーの吹き出し口は破損した吹き出し口の残った部分に外から板を当て座金とモクネジで内側から固定した。上から見ると5角形となり破損した部分も塞がった。その上にモーター台を置きファンモーターアセンブリーを固定して修理は完了した。

吹き出し口は木製のモーター台のために少し狭くなったが、運転してみると振動もたいしたこともなく冷凍機も快音を発して、ご主人も見るからに安堵した様子で、いりだけ持って帰ってくれといいながら私の車に玉葱などを放りこまれた。

次の朝出勤すると上司から「冷凍機屋は大工もしなければならないのか」と言われた。

「昨夜どんな修理をしたのかえらい喜んでいたが・・・」



§ 6. 大丈夫・・・でも再確認

私がサービスマンとして、初めて携わった仕事は「冷房試運転」でした。

今から、25年前の話となります。当時はまだ、水冷式パッケージが主流で、我々サービスマンが、冷却塔清掃や冷暖バルブの切替をしなければ、冷房や暖房ができない状況でした。

まだ入社後、日の浅いときに冷房試運転に同行した際の教訓となった、話をさせていただきます。それは、当時のパッケージに半密閉圧縮機が使用されており、冷房時期前に圧縮機の分解整備を実施し、それを取り付け後、試運転をする。と、いった作業でした。

圧縮機を搬入・据え付けられた後、先輩社員に教えられる通りに配管や配線の接続を進めていましたが、効率化のため、先輩社員より「お前は、各圧縮機の配管を繋げていってくれ。吐出と吸入の両方やぞ！パッキン忘れるなよ！」と言われ、元気よく「はい！」と返事をし、作業にとりかかりました。

全部で5台分の接続を終わり、昼の休憩の間に真空引きを実施していました。

食事も済ませ、他愛もない話で休憩時間も過ぎていきました。午後の作業にかかり始めた頃、先輩より「真空の状態はどうや？」と聞かれ5台中の2台だけを見て、「大丈夫です。」と答えた。

そのまま、先輩が配線接続を済ませた機械より、順次の試運転を実施しておりましたが、何台目かで真空ポンプが未だ勢いよく稼動している機があることに気付きました。よく調べてみると、吸入管のパッキンがずれており、密閉されていないことが判明。

もう一度、締め付けなおして処置し、再度の真空引きを行う事となり大変な時間のロスが発生させてしまった。

そのときに、先輩から言われた一言が、「指示されたことはよくやったと思うけど、確認を忘れるな！一緒に仕事してるときは、お互いを信頼してるんやからな！」と、注意を受け、非常に落ち込んだことを思い出します。

いくら、新入社員でもやる以上は、相手に信頼されるような仕事をしないとかえって、迷惑をかけることとなる。

このことは25年たった、今でも私の心の中にずっと残っています。

人間として、社会人として、サービスマンとして「信頼」を得、また今後は失わないようにする事が一番大事だと考え、これからのサービスマンに贈りたいと思います。

§ 7. 原点に戻れ

1. はじめに

私の空調システムサービスマンとしての体験談としてご紹介するのは、空調機器のサービス実務は空調システム（設備全体）として現地施工冷媒配管と渡り配線に不具合がある場合、運転状態から故障診断して原因を見つけ出すことが必要であり、それはいかに大変であるかを学んだ事例です。

2. 初期のサービス依頼内容と対応について

設備業者からご依頼された内容は次の通りです。

移設後において空調システムの室内機より、水漏れするとの緊急依頼があった。訪問して点検してみると次の通りであった。空調システムのA系統とB系統の渡り配線のクロスにより、送風停止状態の系統に冷媒が循環した為、熱交換器が凍結し、水漏れしたものと推定し渡り配線の入れ替えを行い処置した。

しかし再度依頼あり、B系統の冷えが悪いとの緊急依頼であった。

3. サービス対応内容について

(1) 訪問して点検してみると次の通りであった。冷房 18℃設定、急速運転にて試運転した。低圧圧力 0.4MPa、また主管の液側途中から -10℃であることが判明し、原因として相当圧力的に絞られている状況であることがわかった。また既設配管を利用されていることもあり、原因として途中の冷媒液側配管の変形等および詰まり現象と推定した。従って処置については設備業者に改善依頼した。

(2) 再度依頼があり、C系統も調子が悪いとのサービスコールであった。

訪問して点検すると点検コード「E 1 8」が出ており、親と子機間の通信異常を確認した。親機と子機の設定が間違っていたため項目コードを変更し、動作OKとなった。しかしC系統が、なおかつ調子が悪いため点検を継続して行った。B系統の液側配管の接続状態を点検するとC系統の室外機へ現地冷媒配管が接続されていることが判明した。

●原因・・・B系統が冷房、C系統がサーモOFF又は停止時においてBからCの室外機及び室外機のPMV（パルスモーターバルブ）までに冷媒が押し込まれたため、液側配管温度が異常に下がったものと推定した。

●処置・・・B系統とC系統との液管クロスを溶接作業にて正規の状態に改善実施して正常な状態になり完了した。

4. 空調システムの設備概要について

06年4月に納入され、08年5月に設備の移設を実施された。空調システムとしては8馬力*4系統（ツインタイプ）で構成されている。

5. 据付業者殿への御願い

冷媒配管の接続については工事面にて厳重に注意し、現地冷媒配管と渡り配線は誤配線のないように実施していただきたいと考える。

6. サービス対応面での実態及び体験したこと

(1) 故障診断をして判別するまでに相当の時間と日数がかかった。

(2) サービス対応面で苦労したことはツインタイプの場合、片側の室内機の冷えが悪いとか、色々な条件が重なるので故障判定がしにくかった。

1対1の場合では、冷媒分岐等考えなくてもよいので故障診断が楽と考えられる。

(3) マルチシステムエアコンとしては室内機と室外機が数十台並行して据付されるため、現地冷媒配管と渡り配線ケーブルが間違っただけで違うユニットへ接続されてしまうことがあり、しかも冷媒配管等が埋め込みされているケースがほとんどであり、現地施工冷媒配管に問題があることがわかっていても、不具合個所にたどりつくまでには相当な労力と時間を要する故障診断作業となる。

7. 今回現場体験して勉強になったこと

(1) サービス対応としてマルチシステムの場合、冷凍サイクルに異常が見られるような場合にはまず最初に単独にて系統毎に試運転して熱交換器の状態を見るのが先決と考える。

(2) 冷凍サイクルとしては現地冷媒配管がクロスすると、相当通常の流れとは異なってくるため低圧及び高圧圧力と各部配管温度を測定してその圧力と温度の状況から判断していくことが重要と考えられる。

◎ 空調工事については納入時にて試運転等を行った上で、引渡しが行われており施工ミス等は一切ないことを前提に考え、信頼してサービス実務対応を行う。

したがってサービス対応中全く施工上の問題等頭にないたため故障診断にこれだけの労力がかかってしまう結果になると考える。

◎ 現地冷媒配管の施工上の不具合を点検する場合、サービス対応のやり方としては空調機器の運転状態から故障診断を行いその状態から調べて不具合原因を特定している。

上記2点の内容について特にその難しさを体験した事例であった。

§ 8. 技能検定の思い出

私が冷凍空調の技能検定にかかわったのは昭和 47 年、この検定制度が始まる 2 年ほど前のことと思います。

当時、サービス部のマネージャーをしていた関係上、技能検定の実技テストの問題で、冷媒配管の工作を取り入れることとなり、中央委員の依頼で作図するための材料集めをいたしました。銅管類、継手類、溶接エルボ類、固定金具等、その当時の品物で一番使われている材質、形状の物を選んで検定委員にお渡ししたことを憶えています。

毎年検定の実技テストの大阪府の検定委員として出さして頂いていますが、その材料をみるにつけ当時の事を思い出し、銅管、継手、エルボはおろか固定用のUバンドまで、私がお渡しした品物と変わっていないことには感慨深いものがあります。

それから半年位して中央検定委員よりテスト問題（案）ができたので、テストのトライアルを行ないたい、ついてはこのテストに必要な工具をリストアップして欲しいとの依頼を受け、渡された図面を見ながら実際の作品作りに必要な工具をリストアップし、工具の正式名称等も調べるようなお手伝いをさせて頂きました。

しばらくして、当時の大阪府立堺高等職業訓練校でトライアルが行なわれることになり、その準備委員をさせて頂きました。

試験実施要領、基準書等を基に 2~3 回会合をもち、テストに対する検討を加え、

フレア継手のフレア開き具合は・・・

溶接のろう材の乗り具合は・・・・・・・・

銅管の曲げ加工形状は・・・・・・・・

テストの進め方は・・・・・・・・

等検討したように思います。

いよいよトライアルが行なわれ数社よりサービス技術者に参加してもらい、今日行なわれているテストと同様なことを行ないました。準備が良かったのか溶接のところで少しトラブルが出た程度で、無事終了し「これなら行ける」と自信を深めたものであります。

第 1 回検定より、大阪府の検定委員としてお手伝いさせて頂きましたが、第 1 回、第 2 回のときは受験者数も多く、実技テストの会場も何箇所かに分かれて行いましたがそれでも足りないので、当社のような町工場的な作業場も会場になりました。

実施要領書に従いテストのための設備を用意し、工作作業をする広いスペースを確保するため、普段使用している機械類を撤去、受験者の作業エリアをペイントで区切る作業をいたしました。

冬の寒いときであったため、応急に暖房機を設置し急ごしらえの会場を設けたのですが、暖房が効きすぎたのか、テストで緊張していたのか、受験者が大汗をかいて溶接している様子を見て「少し暑くしすぎたのかな」と気の毒に思ったりしました。

その後、3年ほどして、ふと検定委員の資格ということを考え、これはあくまで私個人の委員の資格なのですが、検定を自ら受けてみようと思い1級にチャレンジいたしました。

実際に受けてみると、時間と緊張等の闘いで何回もテスト前に練習しているにもかかわらず時間一杯となり、寒い日であるのに汗をかきかきやっとクリアーできました。

テストを見ているのとやる方とでは大変な違いであり、何のテストでも難しいものだと実感いたしました。



1級、2級の資格者も相当数となり、各企業であるいは自営業で活躍されていますが、この検定の一層大きな目標でありますサービス技術者の社会的地位の向上はデータがないので云々できません。

しかしながら、資格を持った技術者を保有する企業の有利性も出てきたせいか、一時減少気味であった受験者数も増加の傾向であり、誠に喜ばしいことでもあります。

最後にサービス技術者と書きましたが、正確には技能者でありまして、この実技テストでも作業態度の採点があります。単に空調・冷凍機器の施工・修理を行なう技術者を養成するのではなく、技と心を持った多くの技術者を養成し、サービス技能者の社会的地位の更なる向上を目指したいものです。